

全力投球

開業から3年が経つ兵庫県西宮市のNクリニック。内科・消化器科を標榜する同院には、1日60人の患者が訪れるが、決して、立地に恵まれているわけではない。開業前の診療圏調査では1日の外来患者数が13人と予測されたほどで、新規開業に向いているとはとても言えない場所である。統計データを重視して開業地を選択するのが当たり前となりつつある今、あえてその立地を選定した理由を院長に尋ねると、「その場所が自分の生まれ故郷だから」という、至ってシンプルな答えだった。

そもそも、院長が消化器科を志したきっかけは、内視鏡を使った写真の鮮やかさに魅せられたことだったという。そのため、当然、自身の診療でも“見せる”ことへのこだわりがある。内視鏡を用いた検査結果の写真や、心電図の波形画像データを見せながら患者に説明し、患者の同意を得たうえで、同伴した家族にも同様の説明をする。血液検査の結果も、電子カルテを駆使して患者ごとに時系列で保存されているため、これまでの健康状況と傾向が、患者自身にも一目でわかるようになっている。そして納得してもらえるまで画像と数値データを根拠に、明瞭に説明するところが、この診療所が患者の心を掴む秘訣である。

大腸のポリープ検査では、患者、さらには家族にも内視鏡の映像をリアルタイムで見せて説明する。患者や家族が納得して院長の治療方針



イラスト=川島星河

を受け入れた後も、画像を印刷して持ち帰ってもらうなど、患者の安心に配慮した医療提供を徹底している。

他方、勉強会の多さも特筆もの。患者には健診講座などを、スタッフには遭遇頻度の高い疾病に関する勉強会などをそれぞれ月に1回程度、院内で開催している。このほか、院外では地元の小学校に出向いて喫煙の怖さを伝えたり、電子カルテの活用法をテーマとする医師向けのセミナーで講師を務めることもある。「正しい情報を伝えたい」という院長の想いが、こうした多岐にわたる活動を支えているようだ。

医療機器など、ITを駆使すると、とかく無機的なイメージがつきまといますが、有機的な人間関係を大切にしてきた者特有の誠実な雰囲気が院長には漂っている。そんな院長が、自らの生き方を通じて診療所の経営スタイルを現していくと捉えるならば、生まれ故郷を開業地に選んだ理由も大いにうなづける。

院長に「喜びを感じる瞬間は?」と尋ねると、返ってきた言葉は「すべて」。今までの人生において、目の前の人のために常に全力で応えて来た者だけが口にできる言葉だろう。